

ESPと文学テキスト：英語教育における接点を探して

ESP and Literary Texts: An interface in the EFL Classroom

久世 恭子

上野学園大学

Kyoko KUZE

Ueno Gakuen University

Abstract

The primary aim of the current study is to explore the potential of literary texts in university ESP-oriented courses. Presuming the emphasis on ESP to be one of the causes of reduction of literary texts in English teaching, the paper first reexamines the relationship between ESP and literature. Is it possible to propose an interface between ESP and literature, although they seem to be mutually exclusive for many practitioners? To answer this question, the paper analyzes two case studies: an ESP/EAP course for science and engineering students; and an ESP course for medical students. The findings suggest that literary texts can be used relevantly and effectively in those courses and that students evaluate highly the materials and activities as meaningful ones. The study finally indicates that literary texts have a place in the ESP context especially when we take wide-angle approaches in course design and instruction.

1. はじめに

英語教育において文学テキストを使用する研究は、1980年代前後から英米を中心に広く行われるようになり、文学の教材としての意義は言語的、情意的、文化的観点などから主張されている (e.g. Carter and Long, 1991)。しかしながら、今日、日本の英語授業で文学テキストを使用し関連した活動を行うことはしばしば難しい。文学を遠ざけている要因はいくつかあるだろうが、少なくとも高等教育においては、学生の専攻に結び付いたESP (English for Specific Purposes) を重視する方針もその理由の1つであると考えられる。

ESPは「ある特定の目的をもって学習され使用される英語」(白畑他, 2012)と定義され、その概念自体は新しいものではない。たとえば、戦後間もない1955年に日本経営者団体連盟が「シェークスピアより使える英語を」という要望書を提出し、社会に出てからすぐに役立つ実用的な英語を教えてほしいと訴えたが、これもESPの促進に関連する。江利川 (2008) が、この要望書が英語教育における脱英米文学への政策誘導を加速するきっかけとなったと指摘していることを考えると、ESPと文学の複

雑な関係はこの頃から続いていると認識できる。しかしながら、ESPは文学と全く相容れないものなのだろうか。文学には一定の役割があると主張されているならば、ESP重視の大学英語教育の中で、たとえ単発的にでもそれを活かす可能性はないだろうか。

このような背景を踏まえ、本研究では、ESPと文学教材の関係を再考し、授業事例に基づいてESPにおける文学テキストの可能性について議論する¹⁾。事例は、理工系学部でESPと文学の接点を見出して文学教材を単発的に使う授業と、医療系学部においてESP習得を促す目的で医療小説を長期的に使う授業の2件である。事例研究を通し、以下の研究課題に答えることを本研究の目的とする。

1. ESPと文学の接点を見出しながら、ESP重視の授業で文学教材を使うことは可能だろうか。その場合、どのような授業展開となるのか。
2. そのような授業で学習者はどのような反応をし、テキストや活動をどう評価するのか。

2. ESPと文学

英語教育におけるESPと文学の関係について、Hirvela (1990) は、“The terms *literature* and *ESP* are mutually exclusive.” (p. 237) という表現を用い、両者間のリンクを探ることはESP教師にもそうでない教師にも驚きを持って迎えられるだろうと推察する。Stevens (1977) が指摘するように、ESPは、言語教育は文学のためにあるというそれまでの前提に反発する形で発展してきたからである。日本でも、野口 (2013) が「ESP (特定の目的のための英語) テキストと文学テキストは、人間のコミュニケーションが目指す2つの方向の対極にある」(p. 9) と述べており、その理由を、前者は特定の専門領域内でパターン化された言語を扱い特定のグループに対し発信するものであるが、後者は創造的でオリジナルでユニークであることが望まれ、社会全体に向かって発せられるものであると説明している。

伝統的に共通点を持たないESPと文学であるが、一方で、ESPを排他的で極端なコンセプトとしてとらえるべきでないという議論や、そのような場合には文学を入れる余地があるという主張もある。Hutchinson & Waters (1987) は、ESPは特別な言語や教授法ではなく、その教材も特別なものに限定しないという解釈を示しており、また、Widdowson (1983) は、“The purposes of ESP are arranged along a scale of specificity with training at one end and education at the other.” (p. 10) と述べている。ESP教育は conformity/creativity (画一性/創造性) などの観点からバリエーションがあり²⁾、もっとも専門的で画一化されたESP教育は言語トレーニングの性質、その逆のもっとも専門性の低い創造性に富んだものは言語教育の性質を持つという見解である。そして、後者には文学教材の果たす役割があるとHirvela (1990) は主張する。

では、具体的に、ESPと文学がそれぞれの研究や教育の中で関わりがあったのか、見てみたい。野口 (2013) は、ESPと文学をつなぐ接点の1つとして、ESP研究で得られた技術的なサポートが文学作品を読む際に応用できることを紹介している。例えば、ESPアプローチの1つである音韻処理についてはインターネットで文学作品の朗読が音声ファイルとして利用でき、また、コロケーションや文体を調べるためにはコーパス言語学を応用したコンコーダンス・ソフトウェア³⁾ が適しているというわけである。逆にESPの中で文学を使う試みも、数は限られているが、いくつか提示されている。上述のHirvela (1990) では、エンジニアリング専攻の学生のESP授業でSF短編小説を使った例を分析し、科学的な言語や感情的な言語などを幅広く学びながら学習者のコミュニケーション・スキルを伸ばすこと

ができることを主張した。また、Kelly & Krishnan (1995) は、同じくエンジニアリング専攻のシンガポールの大学生に小説を使った授業の方法を示した。この授業では、Horowitz (1990) の「文学を使う際には実際の活動がどのように学生のニーズや希望に合うか考えるべきである」(p. 167) という指摘を活かし、理系の学生が必要とするオーラル・コミュニケーション・スキルとリーディング・スキルを同時に伸ばすために、各々が読んだ小説のブック・レビューをプレゼンテーションの形で発表させる活動を行った⁴⁾。

ESPの1つであるEAP (English for academic purposes) は、より広範なアカデミック目的の英語を意味するため、その習得のために文学教材を用いることは比較的理解されやすいようである。Hirvela (1998) は、大学のディスコースに慣れていない1年生のESL学習者にとって、文学を使って読み書きすることは一般的なアカデミック・リテラシーの獲得に役立つと主張し、また、Hirvela (2005) は、初級レベルのESL writingの教材に何を使ったら良いかという質問に、“It is important to understand how ESL students will respond to the use of literature in the writing classroom.” (p. 70) と答えている。さらに、文学には情報伝達を目的とするテキストにはない要素があり、学習者は文学テキストを通して汎用性の高い narrative formsに触れることができると指摘する研究もある (e.g. Kramersch, 1993)。

3. 事例研究

3.1 事例の概要

本研究では、大学のESPを重視した授業の中で文学的な教材を用いた例を2例取り上げる。それぞれの実施年度・対象学習者・獲得を目指す英語の種類・教材などは表1の通りである。

表1 ESPの授業で文学教材を使用した事例

	対象学習者	英語の種類	教材
【事例1】 (2014年度)	A大学理工系学部 Communication 1 (必修) 1年生2クラス計54名 クラスA:32名, TOEIC平均674 クラスB:22名, TOEIC平均504	ESP (理工系英語) を意識したEAP	Paul Auster, National Story Project “A Family Christmas”, “The Chicken” 他
【事例2】 (2015年度)	B大学医療系学部 (医・薬・看護) 「英語」 (必修) 1, 2年生専攻別クラス	ESP (医療英語)	Oliver Sacks, <i>Awakenings</i> 及び映画 『「レナードの朝」で学ぶアメリカの医療と生活』 教員が作成したワークシート

【事例1】

筆者が2014年に担当した首都圏A大学理工系学部での授業である。当該学部では学部1, 2年は必修、それ以降大学院に至るまでは選択科目として英語の授業が開講されており、一貫して学生の専門に即したESP重視の英語教育が行われている。1年生の英語は、Academic English 1, 2、Communication 1, 2 (いずれも仮名) の2科目で、本研究ではCommunication 1の授業の一部に焦点を当てる。全ての英語

科目は、目的・授業方法・テキスト・評価方法などが統一された共通シラバスのもとに実施されており、学期末試験も共通である。授業は英語で行われている。

Communication 1では、同学部の教員が執筆したオリジナルの教科書を使用し、その構成は以下の通りである。通常、各Unitに2授業時間をかけて進める。

- | | |
|--|----------------------------|
| Unit 1: Introductions | Unit 4: Describing Objects |
| Unit 2: Asking and Answering Questions | Unit 5: Telling a Story |
| Unit 3: Expressing Opinions | |

対象授業では、Unit 5の1時限目にテキストの内容を終えたところで、文学テキストを用いた特別な活動 (Story Project) を行うことを説明し、実施した。翌週 (Unit 5の2時限目) は、授業の前半に特別活動の時間を確保し、残りの時間は通常のテキストを使った授業を行った。特別活動の終了後には、資料1に示すアンケート調査を実施して、テキストや活動に対する学生の評価を聞いた。

資料1 【事例1】 アンケート用紙

CS Story Project 2014				
I would like you to answer the following question...				
Question: How did you feel about the "Story Project"? Please circle the number.				
Good				Bad
5	4	3	2	1
Reasons (Answer with as many choices as you like) 複数回答可				
a. Fun, enjoyable			i. Difficult	
b. Creative			j. Boring	
c. Good for self-expression			k. Embarrassing	
d. Sense of achievement			l. Frustrating	
e. Expanding vocabulary			m. Not useful	
f. Developing speaking skills			n. Irrelevant (関連性がない)	
g. Developing writing skills			(others: in English or Japanese))
h. Logical thinking			()

統一シラバスを持つ理工系ESPの授業で、単発的に文学テキストを使った活動を計画した背景には、筆者自身が学生の専攻にかかわらず文学教材の意義を感じていることもあるが、それだけでなく、教科書Unit 5: Telling a Storyにはnarrativeについて学習しスピーキング練習をするセクションがあり、このnarrativeという語をキーワードに文学とESPの接点を見出すことができると考えたからである。narrativeは、Unit 5で次のように紹介されている。

A narrative is a speech or writing in which we organize and communicate several items of information. There are several ways to place such information in order. This unit looks at how to explain events and processes, in which information is ordered by time (chronological order).

(Sheppard, Fujii, Manalo, Tanaka-Ellis, & Ueno, 2013, p. 59)

Narrativeあるいはnarrativity（物語性）は、文学の大きな特徴の1つであり、私たちが日常生活で過去のことを話したり事象の説明をしたりするときに頻りに用いられている。一方で、理系の学生たちは上級学年になると英語で論文執筆や学会発表を行うが、そのような場でこのnarrativeのスキルが要求される。具体的には、研究デザインを提示するresearch designや実験の方法を説明するexperimental procedureにおいても、情報を正確に、時系列に沿ってスムーズに語る必要があり、narrativeの能力が要求されるのである。従って、上記引用の通り“how to explain events and processes, in which information is ordered by time”について練習しておくことが必要となる。

【事例2】

本事例は、医療系（医・薬・看護）学部の学生を対象に医療英語を教える授業である。それぞれの学部で医療単語や総合英語の教科書と並行して、医療小説である*Awakenings*（邦題『レナードの朝』）を基にした大学英語教科書『「レナードの朝」で学ぶアメリカの医療と生活』（以下、『レナードの朝』）、映画、ワークシートを用いた。【事例1】がESPと文学の接点を見つけて単発的に活動を行ったのに比べ、【事例2】はESP習得のために文学テキストの性質を積極的に活かして使う例と言える。

研究方法としては、コース終了後に担当教員へ半構造化インタビューを行い、授業内容と受講生の反応についてデータを得た。また、シラバス・使用教科書・教員作成のワークシート・教員が受講生から回収したアンケート用紙などを資料として収集し、分析した。

なお、2つの事例で扱うテキストは共に事実に基づいたものであることから、それらを文学的と見なすかどうかについて議論を呼ぶことが予測される。Carter & Long (1991) は、“Literature: fact or fiction?” (p. 13) という項で、読者が“imaginative, truthful re-creation of experience”を持てるようなコンテキストを作者が創造していれば、たとえ、現実の出来事や経験を扱っていても文学と見なすことができると述べており、本研究の2事例もこれに該当すると考えている。

特に、【事例2】の*Awakenings* は病院での症例記録がもとになっており、医療ノンフィクションと見なされる可能性もあるが、この作品が単に情報伝達を目的としたものではないことは日本語版『レナードの朝』に書かれた中野信子氏の「解説」からも読み取れる。以下に部分的に引用する。

なまじサックスが温かみのある人格を持ち、読み手に豊かな想像を呼び起こす表現力を持っているだけになおさら、本書は科学的な事実だけを淡々と書いた論文とは異質なもののように捉えられ、学界から無視されたというのも無理からぬことであつたといえるかもしれません。（中略）温かみのある人格に起因する、患者への共感、共に戦おうとする意志、また、豊かな想像や、文学的な表現力、これらは、科学的に物事を見ようとするときにはすべて、無用のものです。それどころか、結果を汚す邪魔なものとして捉えられる場合がほとんどでしょう。

しかし、人間はそれでは満足できないようにつくられています。

(pp. 647-648)

3.2 授業展開

【事例1】

最初に、教師である筆者が作家Paul AusterとNational Story Projectについて英語で解説し、柴田元幸氏他の訳がついた日本語版書籍を紹介した。次に、トピック・構成・長さなどが教材として適切であるという理由から、Familyの章の“A Family Christmas”、Animalの章の“The Chicken”を選び、作家自身が朗読したCDを2度ずつ聞いてもらった。それぞれの後ではペアでストーリーの内容を英語で語る活動 (retell) を行った。不確かなところは助け合っただけ正確に物語を再現するように促した。その後、“The Chicken”の英語の SCRIPT を配布し、ペアで数回音読するように指示した。この活動は、narrativeの構成や時制、文と文とのつなぎ方などを意識化させるためのものである。そして、宿題として、National Story Projectへの寄稿同様に実際に起こった心に残るストーリーを、人に語ることを想定して英語で書いてくるように指示した。次回授業では、4人程度のグループを作り、お互いに用意してきたストーリーを語り合っが一番良いものを選び、それをクラス全体で発表してもらった。

【事例2】

1年間の予定では、第1回授業のオリエンテーションの直後から『レナードの朝』を使った授業を開始し、背景知識獲得に必要なChapter1, 2を終えたところで映画を観、その後は、別教材と並行して、年間を通して『レナードの朝』とワークシートを使って授業を進める。各学期に1回ずつ医療問題に関する調べ学習とそれをまとめるessay writing/presentation、及び筆記試験を課し、成績評価を行った。また、CALLを使っでの発音練習・録音なども取り入れた。進度は、前期には1 Chapterに2授業時間かけることも多いが、後期になると受講生が授業に慣れてくるので1つのChapterを1授業時間で終えることもできるようになるとのことである。

1Chapterを1授業時間で終える場合の授業時間内の主な手順・活動内容を表2に示す。

表2 【事例2】 『レナードの朝』を用いた授業の主な手順・活動内容

手順・活動内容	説明	備考
Listening	教師（編著者）が平易な英文に書き直した comprehensionの英文を使ってlisteningで穴埋めを行い、直後に答え合わせをする	この英文は予習してから授業に臨むことになっている
Comprehension	Comprehensionの英文の内容について、日本語または英語で質問をする（ワークシート）	単なる訳にならないように工夫
Comprehension (True or False)	教科書の問題III (Comprehensionの英文の内容についてさらに理解を深める)	
Useful expressions	教科書の問題IV (医療小説の中から語彙や表現を学ぶ)	いくつかを選んで実施
Listening focus	教科書の問題V (すべて会話形式)	CDを使用。医療現場での会話を練習
関連の事実から医療英語を学ぶ	教科書の問題 I	本来はpre-readingであるが、最後に扱うことが多い

『レナードの朝』関連の教材は、医・看護学部では医療英語の単語集、薬学部では薬学の総合英語教科書と並行して用いたが、『レナードの朝』を用いた時間の割合は、医・看護学部でコース全体の約8割、薬学部で約5割程度である。

授業目標の例として、医学部のものを示す。

専門に進む前段階として必要な英語力を医療系の英語を中心に、医療・社会問題を考察しながら、「読む」、「書く」、「聴く」、「話す」の四技能にわたって総合的な英語力を養成することを目的とする。さらに医療をテーマとする映画を教材に、聴解力をはじめ、医療系の語彙力や表現力を習得するなど総合的な英語力を養成する。自ら英語で新しい事柄を学ぶ力を養成する。

3.3 学習者の反応

【事例1】

クラスAは、TOEICのスコアから推測できるように比較的英語能力も高く、普段から授業に対して積極的な姿勢が見られ、この活動にも熱心に参加した。これに対して、クラスBでは、十分に準備をしてこなかった者や活動に消極的な受講生も見受けられた。どちらのクラスでも活動後に書いたストーリーを提出してもらったが、それは宿題として意識してもらうのに役立った。

第2週までにクラスAではほとんどの受講生が120 - 150語のストーリーを作成した。その中からクラスメートの評価が高かった1例を以下に紹介する。

When I was an elementary school student, my family and I went to a zoo several times. I particularly remember the time when we went to the Tobu Zoo. In the zoo, when we were walking along a street, we noticed there was a pelican walking on the same street. Then, I thought that it would be safe even if I touched the bird because it was not in a cage and walking freely. So I came closer to the pelican and touched it. At first, the bird ignored me. But it might have felt uncomfortable. All of a sudden, that pelican opened its beaks. Both sides of my head got caught strongly in the beaks and I saw the inside of the pelican's throat.

次に、Story Projectに対する評価とその理由を、アンケートの結果から、それぞれ表3、表4に示す。両クラス共に、この活動に概ね肯定的な評価をしたことがわかる。表3に示したデータで、評価スケールのGoodを5、Badを1として算出した平均値は、クラスAでは4、クラスBでは3.77であった。クラスAの方が高い評価を得たことは、日頃の授業に対する姿勢から予想された結果であった。

表3 【事例1】 Story Projectに対する受講生の評価 (n=34, 22)

	Good (5)	(4)	(3)	(2)	Bad (1)	Average
クラスA	7 (20.6%)	20 (58.8%)	7 (20.6%)	0	0	4
クラスB	5 (22.7%)	9 (40.9%)	6 (27.3%)	2 (9.1%)	0	3.77

表4 【事例1】評価の理由（複数回答可）

	クラスA	クラスB		クラスA	クラスB
Fun, enjoyable	19 (55.9%)	9 (40.9%)	Difficult	10 (29.4%)	8 (36.4%)
Creative	17 (50.0%)	10 (45.5%)	Boring	1 (2.9%)	1 (4.5%)
Good for self-expression	13 (38.2%)	7 (31.8%)	Embarrassing	9 (26.5%)	2 (5.9%)
Sense of achievement	4 (11.8%)	1 (4.5%)	Frustrating	0	0
Expanding vocabulary	6 (17.6%)	7 (31.8%)	Not useful	0	0
Developing speaking skills	8 (23.5%)	6 (27.3%)	Irrelevant	0	1 (4.5%)
Developing writing skills	15 (44.1%)	6 (27.3%)	(Others)	1 (2.9%)	0
Logical thinking	6 (17.6%)	2 (5.9%)			

表5 【事例2】担当教員へのインタビュー（2016年2月29日）

筆者からの質問	担当教員の回答
この教材は、医療系英語のための通常の教材と比べてどのような特徴があると思いますか。	<p><i>Awakenings</i>: 医療を題材に登場人物の関係や起こる事柄との関係性を描き、その中で現代に通ずる医療問題を提起しており、学生はそれを自分で想像しながら読み取り、問題提起することができる。また、重要なケーススタディが1つの流れを持って収められている点で優れている。</p> <p>『レナードの朝』: 物語性があるため、学生に興味を持って学んでもらえる。医療英語や表現に真実味があり、身につけやすい。また、これを利用し、英文文献より医療英語の定義をまとめたり、プレゼンテーションや自分の意見をエッセイにまとめたりする活動が無理なくできる。</p>
この教材を使って実際に教えられたの感想を聞かせて下さい。（良いと思われる点）	<ul style="list-style-type: none"> ・ <u>映画</u>の力が大きく、症例などをよりよく理解することができる ・ <u>深い内容を学びながら、4技能や調べ学習を取り入れることができる</u> (content-based instruction⁵⁾に通ずる) ・ <u>人間性、humanism</u>を学びながら英語学習ができる ・ <u>答えがない問題に取り組むことができる</u> (実際の社会には答えがない問題が多いので)
この教材を使って実際に教えられたの感想を聞かせて下さい。（難しいと思われる点）	<ul style="list-style-type: none"> ・ はじめは、学生が字面だけを訳し、内容を深く考えられないときがある ・ <u>原作が難しいので工夫して使うことが必要である</u> (→教材の準備に時間と手間がかかる) ・ <u>すべての章を終えたことはまだない</u> (時間が足りない)

(下線は本論の筆者による)

表4で評価の理由を見てみると、クラスAの方がより活動を楽しみ、創造的なものとしてとらえていることがわかる。難しいと感じるかどうかという点では、人数では両クラスに差はないものの、クラス全体に占める割合ではクラスBの方が大きかった。やはり英語能力が十分でない場合にはやや負担の大きい活動であったということが言える。しかし、全体的には、両クラス共に「楽しい」「創造的である」という理由が1位、2位を占め圧倒的であった。また、「自己表現ができた」という項目も、特にクラスAでは多かった。ネガティブな理由や感想についても選択肢を設けたが、「恥ずかしい」という回答はAで9、Bで2件見られたものの、「役に立たない」とか「関連性がない」を選んだ者はほとんどいなかった。

【事例2】

筆者が行った担当教員へのインタビューの結果は表5の通りである。文学的な教材の特徴を表すと思われる部分に強調の下線を施した。

表中の「真実味がある」という箇所は、一見、文学教材の特徴でないように見えるが、担当教師によると、このような事実に基づく医療小説では学生が真実性を感じ、また臨場感を抱きながら、作品中に自分自身を投影して心情的にも深くテキストとかかわりながら英語を学んでいくということである。この指摘は、Carter & Long (1991) が文学の特徴を説明する際に用いた “If readers can identify with events and characters and project themselves into them *imaginatively* then a certain truth to experience can have been created.” (p. 13) という議論に通じる。医療英語を機械的に記憶させる、あるいは単に医学論文集を読み進めていく授業方法や、断片的な事実を集めた総合教材とは異なる特徴である。

次の表6では、授業と教材についての受講生の感想をグループ化して示す。これは担当教員が自分のための資料として保管してあったものをインタビューの際に提示してもらったもので、全体数を把握していないため統計的な処理はできないが、ある程度の分量がある回答は全て保管してあるということなので、全体の傾向を読み取ることはできる。

受講生たちは、授業や教材の内容、英語学習などの観点から様々な感想を述べてくれたが、全体的には、自分たちの専門分野の深い内容を扱いながら、同時に英語学習を進めることができたという回答が多かった。1人の受講生は、「専門的な医療単語、文法、言い回しを学んだだけでなく、医療者としての患者への接し方や心構え、向上心を持つ大切さを学んだ」と述べている。これは、まさに担当教員が目標としたところで、内容と共に専門分野の英語力を養成するということである。教材について、「ストーリー」あるいは「物語」という言葉を使った受講生が7名いて、いずれも、そのような要素を持つ教材だからこそ興味を持って読み進めることができ、その結果、医療英語の単語や表現を学ぶことができたと述べている。また、数名以上から示されたのが、困難な状況の中での患者、家族、医療関係者の心の葛藤を知ることができたこと、また、それぞれの患者の背景によって薬の効果が異なるなど医療の奥深さを知ることができたことなどであり、これらも単に医学論文を読む授業などでは得られない成果であると言える。

表6 【事例2】受講生の感想

分類	感想 (回答数)
英語能力の向上に関するもの	現場で役立つ医療の単語・表現などを学べた (5) レポート課題を通じて意見の述べ方・書き方を学んだ 文通りに読んで訳すのではなく推察しながら読むことを学んだ
教材のタイプに関するもの	(物語なので) 読んでいて面白かった (7) ストーリー性があり単語が覚えやすかった (4) 続きが気になり、読み進めたい気持ちになった (3) 映画を楽しみながら英語を勉強することができた(3) 物語なので読みやすかった (2) 実際の話なので興味を持てた (2) 物語を通して症例を学ぶことができた
授業・教材の内容に関するもの	それぞれの患者さんの背景の違いと治療について考えた (6) Sacks博士の人間性、医師としての姿勢に感動、多くを学んだ (5) 医療関係者、患者、家族の探り合い、心の葛藤を学んだ (4) 医療に携わる者としてためになった 薬について考えさせられた 内容の重要な点を考えることができた
その他	もっと映画を観たかった (2) リスニングがもっとあると良かった 予習は総合教材の方がしやすかった 内容がむずかしかった
【まとめ】 教材のタイプと英語学習の関係に言及したもの (上記と重複)	<ul style="list-style-type: none"> - 物語を読む楽しさと医療英語を同時に勉強でき、興味を持てたので単語や表現を覚えることができた (4) - 物語のように進むので読みやすい - 医療に対する知的好奇心を高めながら、英語の勉強ができた - 英語論文ばかりでなく、実際にあったストーリーなので読みやすく、進んで取り組むことができた

(下線は本論の筆者による)

3.4 事例の考察

本研究では、理工系大学生対象のESPの理念に基づいた授業でnarrativeをキーワードに文学との関連性を見出し単発的に文学的な活動を実践した事例と、医療系学部で継続的に小説を使いながら専門性の高いESP (医療英語) を学ぶ事例を取り上げ、授業展開や学習者の反応を分析した。

【事例1】では、narrativeの練習のために文学的な教材が担う役割を探求したが、受講生は、創造的な活動を通して「時系列に沿った語り」の練習をすることができ、かつ、自分の経験を話すという行為によってグループやクラスの中の共感や協調を体験した。アンケート調査では、活動に対して肯定

的な評価が多く、その理由を「楽しい」「創造的である」「自己表現ができた」と述べた。一方で、「難しい」という感想も聞かれたことから、教師は扱う教材や活動を学習者のレベルに合わせ、実践が英語学習として効果的になるように工夫する必要があると言える。

【事例2】では、ESPの授業で文学的な教材を使う意義をより積極的に主張することができたと考えている。医療英語の習得を目指したこの授業で小説を使う意義は何か考察すると、まず、第一に、文学性の薄い教材と比べ、ストーリーや物語性がある教材の方が学習者の興味をかきたて、感情に訴えるので、英語学習が進み単語や表現を覚えやすくなることが挙げられる。これは、ほとんどの受講生が授業中やアンケートで述べ、教師も認めていることであり、結果として英語能力の向上につながる可能性が十分あると考えられる。

第二に、一連の症例を英語で読むこと自体は総合教材や医学論文など他の教材でも可能であるが、医療者の懸命な姿勢や心の葛藤、家族や患者の背景や心の変化などについて知ることは、おそらくこのような小説形式のテキストでしかできないものである。受講生たちは、想像力を働かせて小説の中でできごとや登場人物に自分を投影させ、経験を再創造している。だからこそ、作品中の様々な問題に当事者として対処することができ、「真実味がある」という感想を述べているのである。本教材を通してhumanism、人間性を感じてほしいという教師のねらいも、同様に、小説の中でSacks博士や他の医療従事者、患者や家族の言動に触れ、心の葛藤や変化などにも注目することで達成されている。受講生の専門分野で起こり得る様々な問題、特に答えのない問題を深く考えながらESPを学ぶことができたという点にこそ、文学的な教材を使う意義があるのではないだろうか。

最後に、当該授業では、多様な言語活動の展開が可能となっている。大学生の知的好奇心や専門分野での問題意識を刺激する内容を扱いながらも、医療小説をもとにした教科書と映画の使用によりreading, listeningなど4技能の向上が目指され、また、調べ学習のまとめとしてessay writing, presentationsなども取り入れられている。専門に即した深い内容の提示とESPを学ぶための様々な言語活動の提供という2つの役割を担えるテキストはそれほど多くないと予測されるが、本事例で用いた文学的教材はその1つであると言えよう。

4. おわりに

ESPはその発展自体が文学排除の上に成し遂げられてきたと言われており、今日の大学英語教育のESP重視の授業にも文学を取り入れる余地はないかのように見える。しかしながら、ESPを過度に特定の画一的なものにとらえなければ、文学との接点を見出し、文学教材の特徴を活かすような授業を展開することが可能となる。そのような場合には、ESPにも文学の果たす役割があると言うことができ、両者はもはや完全に対立するものとはならないのである。

注

1. 本稿は、JAILA第5回全国大会（2016年3月13日、於東京理科大学）においてポスター発表をした際の原稿に加筆・修正を施したものである。

2. Widdowson (1983) は、conformity/creativity, goal-oriented/process-oriented teaching, competence/capacity, narrow-angle/wide-angle course designを対比させ、伝統的で厳密なESPの方法は、training, conformityの要素を持つと説明した。
3. 野口 (2013) によると、「検出したい語が文の中央にくるコーパスで、その語の前後にはどのような語がくることが多いのかを統計的に知ることができる。」(p. 18)。
4. この授業では、training/goal-oriented (プレゼンテーション・ユニット) と education/process-oriented (リーディング・ユニット) を組み合わせた。
5. 第二言語/外国語を用いて教科の内容 (content) を学習者に教え、その過程において目標言語を自然な形で習得させようとする教授法 (白畑他, 2012)。

引用文献

- 江利川春雄 (2008). 『日本人は英語をどう学んできたか：英語教育の社会文化史』東京：研究社。
- 白畑知彦・富田祐一・村野井仁・若林茂則 (2012). 『改訂版英語教育用語辞典』東京：大修館。
- 野口ジュディー (2013). 「文学テキストへの ESP アプローチの応用」吉村俊子・安田優・石本哲子・齋藤安以子・坂本輝世・寺西雅之・幸重美津子編著『文学教材実践ハンドブック：英語教育を活性化する』(pp. 9-19). 東京：英宝社。
- 平井清子 (編著) (2008). 『「レナードの朝」で学ぶアメリカの医療と生活』東京：南雲堂フェニックス。
- Auster, P. (Ed.). *I thought my father was God and other true tales from NPR's National Story Project*. New York: HarperCollins. (ポール・オースター編・朗読、柴田元幸他訳、2005. 『ポール・オースターが朗読するナショナル・ストーリー・プロジェクト』東京：アルク)
- Carter, R. & Long, M. N. (1991). *Teaching literature*. Harlow: Longman.
- Hirvela, A. (1990). ESP and literature: A reassessment. *English for Specific Purposes*, 9: 237-252.
- Hirvela, A. (1998). [Review of the book Myra Shulman's *Journeys Through Literature*.] *English for Specific Purposes*, 17: 320-326.
- Hirvela, A. (2005). ESL students and the use of literature in composition courses. *Teaching English in the Two-Year College* 33: 70-77.
- Horowitz, D. (1990). Fiction and nonfiction in the ESL/EFL classroom: Does the difference make a difference? *English for Specific Purposes*, 9, 161-168.
- Kelly, R. K. & Krishnan, L. A. (1995). "Fiction talk" in the ESP classroom. *English for Specific Purposes*. 14 (1): 77-86.
- Kramsch, C. (1993). *Context and culture in language teaching*. Oxford: Oxford University Press.
- Sacks, O. (1973). *Awakenings*. New York: Random House. (春日井晶子訳、1991. 『レナードの朝 (新版)』東京：早川書房.)
- Sheppard, C., Fujii, M., Manalo, E., Tanaka-Ellis, N., & Ueno, Y. (2013). *Communication strategies 1*. 東京：DTP.
- Strevens, P. (1977). *New orientations in the teaching of English*. Oxford: Oxford University Press.
- Widdowson, H. G. (1983). *Learning purpose and language use*. Oxford: Oxford University Press.